九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『それから』の「ヴルキイル」

伊佐山，潤子
鹿児島女子短期大学助教授

https://doi.org/10.15017/10375

出版情報：文獻探究. 30, pp.1-6, 1992-09-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

研究ノート

『それから』の「ヴルキイル」

伊佐山潤子

はじめに

『それから』に出てくるおびただしい小道具の数々、たとえば指輪・植物・髪型・服装・香り・雨・電車・赤いもの、あるいはアンドレーエフやダヌンチオといったものに関しては既にさまざまに論じられて来ている。しかし、「ヴルキイル」を正面から取り上げている論考は私が読み得た限りではないように思われる。「ヴルキイル」が北欧神話に登場する十二人の武装した乙女で、主神オーディンの使いとして戦場に倒れた勇者たちを選び、天上の宮殿ヴァルハラに連れて行ってもてなすといったようなことは各種の注釈などにも説明があるけれども、なぜ『それから』に「ヴルキイル」なのか、作品の中での「ヴルキイル」の意味という問題について、これまで等閑に付されてきたのは不思議な気もする。ただ、竹盛天雄氏が次のように述べておられることには刮目させられる。

代助が「注文」（七）して描かせたという「ヴルキイルを雲に見立てた」（七）欄間の絵は、日露戦後の実業家の「客間」を飾るデザインとしては場ちがいで、不調和を浮き立たせる装置のように思われる。語り手が代助の眼からとらえているように、この絵が「出来上つて、壁の中へ嵌め込んでみると、想像したよりは不味かつた」（七）というのは、その突出ぶりと不調和が浮きあがってくる以外には、「ヴルキイル」の活躍の場は封じこめられている。

と（注一）。

「ヴルキイル」ということばは作中二度きりしか用いられていないし、［三］と［七］の二か所にちらっと出て来るだけであるから、物語の本筋にたいして影響のないものとして大方の読者の目にとまらなかったのであろうことを思うとき、竹盛氏の言及は貴重なものと言えよう。だが、本当に「ヴルキイル」は読み過ごされてよいものなのであろうか。竹盛氏の言われるように、単に「その突出ぶりと不調和」を浮き出すだけで全く「活躍の場は封じ込められている」のだろうか。私見ではこの「ヴルキイル」にはもっと何か意味があるのではないかと思われる。以下この点について述べてみたい。

一

「ヴルキイル」は、青山にある代助の父の家の客間に現れる。［一］で同時に届いた平岡の葉書と父の封書という発端を受けて、［二］でまず代助と平岡の再会が描かれ、［三］で父の呼出しに答えて代助が青山の家を訪れる、という具合に物語は進んで行く。その［三］のちょうど中ほどあたり、何で呼ばれたのか不得要領のまま会見が終わり、他出する父を玄関まで送った代助が引き返

して来た所が「客間」で、この客間についてこう述べてある。

是は近頃になつて建て増した西洋作りで、内部の装飾其他の大部分は、代助の意匠に本づいて、専門家へ注文して出来上つたものである。ことに欄間の周囲に張つた模様画は、自分の知り合ひの去る画家に頼んで、色々相談の揚句に成つたものだから、特更興味が深い。代助は立ちながら、画巻物を展開した様な、横長の色彩を眺めてゐたが、どう云ふものか、此前来て見た時よりは、痛く見劣りがする。是では頼もしくないと思ひながら、猶局部々々に眼をつけて吟味してゐると、突然嫂が這入つて来た。

しばらく二人で話をしていると誠吾から電話がかかって来て、梅子は中座する。

御緩と見送つた侭、又腰を掛けて、再び例の画を眺め出した。しばらくすると、其色が壁の上へ塗り付けてあるのでなくつて、自分の眼球の中から飛び出して、壁の上へ行つて、べた〳〵喰つ付く様に見えて来た。仕舞には眼球から色を出す具合一つで、向ふにある人物樹木が、此方の思ひ通りに変化出来る様になつた。代助はかくして、下手な個所々々を悉く塗り更へて、とう〳〵自分の想像し得る限りの尤も美しい色彩に包囲されて、恍惚と座つてゐた。所へ梅子が帰つて来たので、忽ち当り前の自分に戻つて仕舞つた。

この後代助は梅子から佐川の娘との縁談話を聞かされるのであるが、この「模様画」が一体何を描いたものなのかは読者に全く知らされないままで終ってしまう。

次にこの「画」が現れるのは［七］の中ほど、三千代に頼まれた「五百円と少し許」（四）の金の工面ができず、梅子に「相談して見やう」と代助が青山の家を訪れた時である。ここでやっとこの絵が「ヴルキイル」であることが明らかにされる。客間で梅子と縫子がピアノをひいている。

代助は先刻から、ピヤノの音を聞いて、嫂や姪の白い手の動く様子を見て、さうして時々は例の欄間の画を眺めて、三千代の事も、金を借りる事も殆んど忘れてゐた。部屋を出る時、振り返つたら、紺青の波が摧けて、白く吹き返す所丈が、暗い中に判然見えた。代助は此大涛の上に黄金色の雲の峰を一面に描かした。さうして、其雲の峰をよく見ると、真裸な女性の巨人が、髪を乱し、身を躍らして、一団となつて、暴れ狂つゐる様に、旨く輪廓を取らした。代助はヴルキイルを雲に見たてた積で此図を注文したのである。彼は此雲の峰だか、又巨大な女性だか、殆んど見分けの付ない、偉な塊を脳中に髣髴してひそかに嬉しがつてゐた。が偖出来上つて、壁の中へ嵌め込んでみると、想像したよりは不味かつた。梅子と共に部屋を出た時は、此ヴルキイルは殆んど見えなかつた。紺青の波は固より見えなかつた。たゞ白い泡の大きな塊が薄白く見えた。

「ヴルキイル」に関する記述は作中これだけである。

竹盛氏が言われるように、「自分の知り合ひのさる画家に頼んで、色々相談の揚句に成つたもの」であるのに「偖出来上がつて壁の中へ嵌め込んでみると、想像したより不味かつた」ということだけなら、「『客間』を飾

るデザインとしては場ちがいで、不調和を浮き立たせる装置」と言ってもよかろう。しかし、〔三〕から〔七〕の引用部分の間には十日あまりの時間の経過があり、集英社版『漱石文学全集』の本文で三十数ページの隔たりがあるにもかかわらず、〔七〕で「例の欄間の画」とかなり強引に前とのつながりを読者に喚起させるような表現がなされているところに、作者のあるこだわりが感じられないだろうか。初めのうち代助は「ひそかに嬉しがつてゐた」のに、「此前来てみた時よりは痛く見劣りがする。是では頼もしくない」と思うようになり、「ヴルキイルを雲に見立てた積で」いたのがその「ヴルキイル」は見えなくなって、「たゞ白い泡の大きな塊が薄白く見えた」というように、代助の絵に対する気持ち・見方が時と共に微妙に変化して行っている点は看過できないのではないか。また、〔七〕以降、〔九〕〔十二〕〔十四〕〔十五〕の各章でも青山の家は出て来るのに、一切「ヴルキイル」については触れられないままであることも気になる。物語の進行とこの「ヴルキイル」の間には何らかの密接な関連があるのではないか、というのが私の考えである。以下さらに細かく読んで行く。

二

まず引用部分の最初にある「時」にかかわる表現で、「此前来て見た時よりは」とある「此前」とは一体いつのことなのであろう。こんなことを問題にしている人はいないようであるが、私はこれを重視したい。というのは、作中で代助が青山の家を訪れるのは〔三〕のこの場面が第一回目なのであって、これ以前の訪問は物語の始まりよりも前という設定になっているからである。すなわち、「此前」と〔三〕の訪問との間に平岡の葉書と父の封書がはさまれている形になっているのだ。

代助を取り巻く状況で「此前」と〔三〕とで違っていることは何か。平岡と三千代の上京である。代助は〔二〕で平岡と再会した。三千代にはまだ会っていない。しかし〔一〕の終わりのところで「廿歳位」の写真は見ているし、〔二〕では平岡から「妻が頻に、君はもう奥さんを持つたらうか、未だらうかつて気にしてゐたぜ」と告げられてもいる。そして、代助に「君の兄さんの会社の方に口はあるまいか」と言わなければならない平岡の状態、子供を亡くして後「未だにも何にも、もう駄目だらう。身体があんまり好くないものだからね」という三千代の様子を知っている。「此前」の代助と〔三〕の代助とでは、既にこれだけ違っているのである。

「丸で忘れる訳には行かず、「時々思ひ出」しては「今頃は何うして暮してゐるだらうと、色々に想像して見る事があ」っても、この「約一年余といふものは、此春年賀状の交換」をしたのみ（二）という状態にあった平岡夫婦、とりわけ三千代の上京とその境遇が、「此前来て見た時」と今回〔三〕の代助の「ヴルキイル」の見方に影響を与えているという風に言えるのではないかと思う。

次に、〔三〕から〔七〕までの間に代助は四回三千代と会っている。旅宿でちらっと見て三千代が「蒼白い頬をぽつと赤くした」時（四）、借金を頼みに三千代が代助を訪ねて来た時（四）、平岡夫婦の引越しの時（五）、

代助が平岡の家へ行って「職業談議」をした時（六）の四度である。これらの邂逅を通して、先の「七」の引用部分に至るまでの間に、経済的に困窮しており体の具合も芳しくない三千代に対して、代助は「どうかして、此東京に落ち着いてゐられる様にして遣りたい」と思い、「一層此方から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遥かに愉快だといふ」気持ちさえ持つようになっている。現実に三千代と顔を合わせ、同情し、何とか救ってやりたいという感情を代助が持つのと同時に、ということはつまり、三千代が代助にとって一種特別な存在になったのと時を同じくして「ヴルキイル」は消えて行くのである。そして、これ以後三千代の存在は次第に大きくなって行くばかりであり、「ヴルキイル」は二度と登場することなく作品は終わる。

このように見てくると、「ヴルキイル」と三千代との間には相関関係のある事がうかがえはしないか。三千代は「ヴルキイル」なのだ。

三

ここで改めて北欧神話における「ヴルキイル」について確認しておこう。「ヴルキイル」とは「死者を選ぶ者」という意味で、武装して馬に乗り戦場を駆けめぐっては倒れた勇者たちを天上のヴァルハラに導く。勇者たちはヴァルハラで「ヴルキイル」にもてなされ、世界の終末に際して起こるとされる神々と巨人族との戦いに備えて絶えず腕を磨いておかなくてはならない。「ヴルキイル」に選ばれて神々の仲間入りをし主神オーディンと共に巨人族を相手に戦う、というのは、戦士の中の戦士、真の勇者と認められることであり非常な名誉でもある。しかし見方を変えれば、戦士たちは「ヴルキイル」のおかげで死して後なお戦い続ける運命を担わされ、しかも巨人族との戦いにおいて神々の側が勝利をおさめることは決してないという状況に立たされることになるのである。「ヴルキイル」に選ばれた勇者は倒れるまで巨人族と戦い、残るのは死後の名声のみというのが北欧神話の骨格である（注二）。

以上の点を押さえた上で三千代を眺めてみると、いろいろ興味深い事柄が見えてくる。

たとえば、「十」で三千代が百合の花を持って代助を訪ねてくる場面の直前。代助は「リリー・オフ・ゼ・ヴレー」を「水の中に浸して」眠っている。

一時間の後、代助は大きな黒い眼を開いた。其眼は
しばらくの間一つ所に留まって全く動かなかつた。
手も足も寝てゐた時の姿勢を少しも崩さずに、丸で
死人のそれの様であつた。

この代助を三千代は見ている。「顔を見て、あんまり善く寝てゐるもんだから、こいつは容易に起きさうもないと思つた」のか、「起さない方が好い」「一寸神楽坂に買物があるから、それを済まして又来るから」と言って三千代は「出て行った」のである。眠っている「死人」のような代助を眺める三千代の姿は、戦場に倒れた勇者を探す「ヴルキイル」に重ならないか。

そして三千代は代助を選んでいる。米田利昭氏は「代助が三千代を選んだのは事実」と述べておられるが（注三）、それより先に代助を選んだのは三千代の方であっ

た。いま詳述する余裕はないが、既に中山和子氏に指摘がある通り（注四）、すっかり眠り込んでいる代助を見たあとで買い物のついでにわざわざ「回り路をして。御負に雨に降られ損なつて、息を切らして」まで百合の花を買って、「結つた許りの銀杏返」で代助の前に現れた時、もう三千代は代助を選んでいたのだ。「十四」で代助が「僕はあの髷を見て、昔を思ひ出した」と言っていることからも、この前後関係は明白である。

さらに言えば、三千代が「原因」（十六）で、代助は「自ら切り開いた此運命の断片を頭に乗せて、父と決戦すべき準備を整へた。父の後には兄がゐた。嫂がゐた。是等と戦つた後には平岡がゐた。是等を切り抜けても大きな社会があつた。代助には此社会が今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦ふ覚悟をした」（十五）のである。

「戦に出たのを頗る自慢にする」父から「御前抔はまだ戦争をした事がないから、度胸が据わらなくて不可ん」とけなされても、「臆病で耻づかしいといふ気は心から起らない」と「臆病」であることを自認していた代助（三）が、「自分で自分の勇気と胆力に驚いた」（十五）くらいの「覚悟」である。駒尺喜美氏の言われる如く、代助は「お仕着せの、他に尽すための勇気は、もち合わせていないが、自己の内部から湧いてくる、自己の必然、自己の自然に基づいた勇気は十二分にもっている」（注五）。この点において代助は真の勇者と言ってよい。

だがこの代助の「決戦」で、代助の側に勝ち目はない。「三千代以外には、父も兄も社会も人間も悉く敵であつた。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺さうとしてゐる。代助は無言の侭、三千代と抱き合つて、此焔の風に早く己れを焼き尽くすのを、此上もない本望とした」（十七）とあるように、「全然暗黒に見え」る社会「凡てと戦」って、代助ならずとも一個人が勝てるわけがない。勝敗は初めから決まっているのである。だが、負けるとわかっていても代助は戦い続けるよりほかないだろう。倒れて死ぬその時まで。三千代のために代助はそのような運命を担わされてしまったのだから。

強大な巨人族との戦いのうちに破滅の日を迎える北欧神話の神々の姿に代助はいかによく似ていることか。

三千代を「ヴルキイル」とすれば、『それから』をこのように読むことができよう。

三千代ゆえに代助が全く勝つ見込みのない社会との戦いに立ち上がらざるを得なくなる、という『それから』の基本構造は［三］の「ヴルキイル」の登場の時点で既に暗示されていたと言える。「欄間の画」の微妙な変化は三千代という現実の「ヴルキイル」が代助の前に現れたためと考えたらよいのではなかろうか。

三千代について、「救済の女であるけれども、結果的に代助を非常に窮地に陥れてしまう」「救済の女が破滅を準備してしまうという両義性があるかもしれない」との評があること（注六）も、三千代を「ヴルキイル」と解すればより納得が行くように思われる。名誉と究極における破滅、すなわち戦って後の死という運命をもたらすものが「ヴルキイル」であるからだ。

『それから』は、三千代という女のためにそれまでの自己を変えることを余儀なくされ、その結果、勝ち目のない社会との戦いに歩を進めざるを得なくなる代助の物語と言えるかもしれない。

おわりに

『それから』をギリシア神話になぞらえて読もうとする試みは既にいくつかあるようだが（注七）、北欧神話との関連もいま少し重視されてもよいのではないかと思われる。

比較文学的研究は勿論筆者のよくするところではないからここで深くは立ち入らない。が、漱石の初期の作品『幻影の盾』も、物語全体はアーサー王伝説に拠っているとはいえ、その中心となる「盾」そのものは北欧神話の世界からもたらされたものであることには注意する必要があるだろう。「ヴルハラの国オヂンの座に近く、火に溶けぬ黒鉄を、氷の如き白炎に鋳たるが幻影の盾なり」と記されているからである。

『幻影の盾』などを思い合わせるとき、『それから』に現れる「ヴルキイル」の意味はそう軽いものとは言えないような気がしてくるのだが。

漱石と北欧神話との問題は今後の課題とされるべきことを付け加え述べて、本稿はひとまず置く。

注

一　「手紙と使者――『それから』の劇の進行――」　文学　季刊　二の一　（一九九一・一）
　のち、『漱石作品論集成　第六巻』（桜楓社　一九九一・九）所収。

二　北欧神話については
　ヴィルヘルム・グレンベック　『北欧神話と伝説』（山室静訳　新潮社　一九七一・一二）
　谷口幸男訳　『エッダ――古代北欧歌謡集』（新潮社　一九七三・八）
　菅原邦城　『北欧神話』（東京書籍　一九八四・一〇）
　ほか参照

三　「代助の冒険――『それから』」　『わたしの漱石』（勁草書房　一九九〇・八）所収［初稿は一九八五・四発表］

四　「『それから』・夏目漱石――〈自然の昔〉とは何か――」　国文学　解釈と教材の研究　（一九九一・一）

五　「自己本位の確立――『それから』」　『漱石という人――吾輩は吾輩である』（思想の科学社　一九八七・一〇）所収

六　「鼎談」（『漱石作品論集成　第六巻』注一参照）所収の木股知史氏の発言

七　坂口曜子　「渦巻く宇宙――『それから』論――」　『魔術としての文学――夏目漱石論――』（沖積社　一九八七・一〇）所収　ほか

付記　筆者引用の『それから』の本文は集英社版『漱石文学全集』によった。ワープロ原稿の都合上ルビは省略、漢字も新字体になっている。

――鹿児島女子短期大学助教授――